

MOT Collection:

M
O
T
コ
レ
ク
シ
ョ
ン

vol. **Journals 2**

日
々、
記
す

2021 11.13 sat.
2022 2.23 wed.

Saturday, 13 November – Wednesday, 23 February
Museum of Contemporary Art Tokyo, Collection Gallery

東京都現代美術館

コレクション展示室

主催

東京都
公益財団法人

東京都歴史文化財団

東京都現代美術館

東京都現代美術館では、戦後美術を中心に、近代から現代に至る約5,500点の作品を収蔵しています。「MOTコレクション」展では、会期ごとに様々な切口を設けて作品を展示し、現代美術の持つ魅力の発信に努めています。

今回は「Journals 日々、記す vol.2」と題して、私たちの生活を一変させたコロナ禍や、世界規模で開催されてきたオリンピック、なにげない日常などを背景に日々制作された作品を、多彩な作家たちによるアンソロジーのように構成、展示します。

Chim ↑ Pomが緊急事態宣言下の東京を舞台にした《May, 2020, Tokyo (大久保駅前—青写真を描く—)》(2022年1月末まで展示)、大岩オスカルがニューヨークで描いた「隔離生活ドローイングシリーズ」とオリンピックに関わる3都市をテーマにした大作(いずれも特別出品)に加え、康夏奈(吉田夏奈)の特集展示、フルクサス(塩見允枝子(千枝子)、ナムジュン・パイクほか)、三島喜美代、郭徳俊、クリスチャン・ボルタンスキー、アピチャップポン・ウイーラセタコンなどによる約100点で、私たちの生きる社会や日常、その記憶の在り方を照らし出します。2フロアにわたる展示をご堪能頂ければ幸いです。

最後になりましたが、本展の開催にあたり多大な協力を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。

The Museum of Contemporary Art Tokyo houses a collection of approximately 5,500 works, which span the modern and contemporary eras with a focus on postwar art. The *MOT Collection* exhibition strives to convey the appeal of contemporary art by introducing works from the collection based on a variety of perspectives in each edition.

In this edition, titled *Journals Vol. 2*, we present an anthology-style exhibit made up of works created on a daily basis by a diverse range of artists dealing with the coronavirus pandemic, which has transformed our way of life; the Olympics, a global-scale event; and scenes from ordinary life.

The exhibition features Chim ↑ Pom's *May, 2020, Tokyo (Okubo Station) — Drawing a Blueprint* —, set in Tokyo during the COVID-19 state of emergency (on display until the end of January 2022), and Oscar OIWA's "Quarantine Series," a group of prints based on digital drawings that the artist made in New York, and his large-scale work *Zeus: The God of Olympia*, which depicts three cities related to the Olympics. It also contains a special display of work by KOU Kana [Yoshida Kana], and approximately 100 pieces by artists such as SHIOMI Mieko [Chieko], Nam Jun PAIK, and others associated with Fluxus; MISHIMA Kimiyo; KWAK Duck Jun; Christian BOLTANSKI; and Apichatpong WEERASETHAKUL, which shed light on our society, everyday life, and the state of memory. We hope you will enjoy this exhibition, presented across two floors of the museum.

In closing, we would like to express our heartfelt gratitude to all of those who have honored us with their unstinting cooperation in realizing this exhibition.

Chim ↑ Pom

Chim ↑ Pom

Chim ↑ Pom は、卯城竜太、エリオ、林靖高、岡田将孝、稲岡求、水野俊紀の6名によって、2005年に結成されたグループです。渋谷に生息するネズミを扱った《スーパー☆ラット》(2006年)以降、社会や歴史の諸相に光を当て、災害や内戦、都市生活といった現実の事象それ自体にダイレクトに介入するプロジェクトベースの制作を続けています。

ここでご覧いただく《May, 2020, Tokyo (大久保駅前) — 青写真を描く —》は、昨年来私たちが経験してきたコロナ禍、それにとまなうオリンピックの延期や生活の変容、あるいはその忘却などをさまざまに想起させる作品です。

この作品は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、2020年4月7日に政府によって発出された緊急事態宣言(第1回目、同年5月25日解除)によって、人の姿が消えた屋外で制作されました。感光液を塗ったカンヴァスを駅のビルボード(屋外用の大型看板)に設置し、宣言期間中晒し続けることで、その間の街の光や空気を焼き付けたのです。タイトルにある「青写真」は、本作の技法を示す語であると同時に、心に描く「未来図」を意味します。東京オリンピック・パラリンピックの延期が発表されたのは2020年の3月26日でした。大イベントが文字通りいったん青写真に帰した、その無二のタイミングが記録されているわけです。

その後、一度延期された東京オリンピック・パラリンピックは「2020」を掲げたまま、様々な問題を内包しつつ無観客で開催されたのはご存知の通りです。巷に喧伝されたスローガン「TOKYO 2020」を臆面もなく本歌取りすることで、混在する様々な思惑や文脈をその間の空気とともに視覚的に結実させた本作は、この時代の「東京」の一つの肖像であり、絵画を模した一つの歴史画、モニュメントだといえるでしょう。

大岩オスカー

Oscar OIWA

大岩オスカー(1965-)は、日系ブラジル人の二世としてサンパウロに生まれました。大学で建築を学んだ後、1991年に来日。アーティストとしてのスタートを切り、2002年からはニューヨークにスタジオを構えています。サンパウロから東京、ニューヨークへと拠点を移す中で、大岩は事象を地球規模で捉える視点によって都市と人との様々な関わりを観察し、その歴史と未来を大胆に捉えてきました。光と闇、静と動、自然と人工といった相反する要素を巧みな構成と豊かな筆触により画面上で混ぜ合わせ、生物のような都市の姿を浮かび上がらせてきたのです。

《オリンピアの神：ゼウス》は、パリの日本文化会館での「都市とスポーツの祭典」をテーマとした展示のため2019年に描かれました。リオ、東京、パリ、とオリンピックの開催都市のそれぞれが私的な記憶と象徴的モチーフの混合として描かれ、3点の繋ぎ方で絵巻にも肖像画にも姿を変えます。日本の絵巻などから想を得た画面を横断する雲のモチーフは、作家にとって、広く地球を覆う世界規模の循環、人の交流にも準えられるものでもあり、本作でもその帯が複数の時空を跨ぐようにダイナミックに描かれています。

一方で、こういったシームレスな交流が古来よりパンデミックの要因となってきたことは周知のとおりです。この作品の対面には、感染被害の大きかったニューヨークでロックダウンによりスタジオへ向かえず、隔離生活を余儀なくされた作家が、日記のように描いた一連の作品を展示します。人の姿が消えた現実の街と「空想の旅」を、歴史や現実への言及を交えて描き出した連作は、日々記された作家の意志の痕跡であるとともに、見る者一人一人の生と重なる優れたドキュメンタリーであると言えるでしょう。2つの作品の間に世界の相貌が浮かび上がります。

河原温

KAWARA On

コンセプチュアル・アートの先駆者として世界的に知られる河原温(1932-2014)は、ニューヨークでの定住を始めてから1年半ほど後、1966年1月4日から「デイト・ペインティング」(“Today”シリーズ)の制作を始めました。

8つの決まったサイズから選んだカンヴァスにダークグレイ、赤、青のいずれかで色を塗る／滞在先の公用語を使い*、当日の日付を白いサンセリフ文字で描く／その日中に完成しなければ作品を破棄する——自ら定めた厳格な決まりに従って、河原は2014年に亡くなる前年まで約半世紀に渡って3000点近くのデイト・ペインティングを制作しました。完成した作品は作家がつくった厚紙の箱に収められ、その底には、制作地で発行された新聞の切り抜きがしばしば貼り込まれています。きわめてシンプルな要素から成る、一見、匿名で無機質な絵画。しかし、当日の日付を滞在中の土地の言語で描くというトートロジカルな行為から生まれる作品の連なりは、作家が確かに存在した時間と場所を示す、生存の記録になっているのです。

20世紀の100年分の日付が並ぶ《One Hundred Years Calendar》では、河原が生存した日に黄色、デイト・ペインティングを1点制作した日に緑、2点以上制作した日に赤で印がかきこまれています。河原が時代や社会情勢、生活の変化にかかわらず、日々の連なりの中で制作し続けたデイト・ペインティング、そしてその記録が刻まれたカレンダーは、個人の行動や生死を遥かに超えて進みゆく長大な時間の流れにも、私たちの思考を敷衍させていきます。

*ただし日本をはじめアルファベットを使用しない国では、国際補助語としてつくられたエスペラント語が使用されました。

フルクサス

Fluxus

フルクサスは、音楽、詩、美術、映像、パフォーマンスなどのジャンルを横断し、アメリカ、ヨーロッパ、日本など世界各地に広がった前衛芸術運動です。語源に、流れる、なびく、変化する、下剤をかけるなどの意味を持つこの運動は、1960年代前半からリトアニア系アメリカ人、ジョージ・マチューナス(1931-1978)を中心に組織され、アートと日常の壁を超えるように、多岐に渡る活動を展開しました。

彼らの活動の軸となった「イヴェント」とは、何気ない行為を簡潔な言葉で表した指示書＝「スコア(楽譜)」を、詩的な想像力やユーモアをもって解釈し「演奏」する、というものです。マチューナスや鬚嘔(1931-)らが暮らしたニューヨークのロフトでも、作家たちが互いにスコアを持ち寄り、度々イヴェントが上演されました。また、マチューナスは、ロフト近くの問屋街で調達したプラスチックケースにデザインしたラベルを貼り、スコアを記したカードやオブジェを入れたキットと印刷物の製作に情熱を注ぎ、フルクサスの作品をマルチプルとして広く流通させようとしてきました。

塩見允枝子(千枝子)(1938-)は、1965年、イヴェントのステージをもっと拡張しようと「スペイシャル・ポエム(空間的な詩)」を始めます。No.1は、「地球に言葉のコラージュをする」という発想から、フルクサスの住所録をもとに作家たちに招待状をだし、任意の“言葉をカードに書いて、それをどこかに置く”というイヴェントの演奏とその報告を依頼しました。それぞれの日常の中で行われたイヴェントの記録は、塩見の手で世界地図上に編纂され、参加者にも送り返されました。イヴェントを端緒に世界中の人と繋がることで一つに綴られた本作は、グローバルに広がる今日的なコミュニケーションとも重なって見えます。このほか、草創期にフルクサスに参加したナムジュン・パイク(1932-2006)の初期の映像作品も含め、日常を創造的に眼差し直す活動を多彩に展開したフルクサスの作家たちによる作品をご紹介します。

三島喜美代、郭徳俊

MISHIMA Kimiyo, KWAK Duck Jun

アンフォルメル旋風が巻き起こった1950年代に画家として出発した三島喜美代(1932-)は、抽象絵画を経て、1960年頃より、海外から持ち帰ったり友人から手に入れた新聞や雑誌、広告によるコラージュ作品を手がけるようになります。切断された情報を集積した大画面に、アクリル絵具の色面や筆致を加えた抽象的造形のコラージュには、時として、義理の兄が軍隊から持ち帰った毛布や、焼けこげた蚊帳など、自身の記憶に結びついた廃品が使われることもありました。1966年以降は、米国の雑誌『LIFE』をはじめ、画像や記事をカンヴァスに転写するシルクスクリーンの技法も導入します。

10 テレビの普及や週刊誌ブームが加速した高度経済成長期、「情報」という言葉がしきりに叫ばれた時代でした。1970年代はじめ、三島は、落とすと簡単に割れてしまう陶という素材に身近な印刷物をシルクスクリーンで転写する、新たな彫刻を閃きます。無造作に重ねられたマンガ雑誌や丸まった新聞——人々に消費され、日々ゴミとなっていく印刷物——として形を留めたこの「情報の化石」には、三島の感じた「氾濫する情報に埋没する恐怖」があっけらかんとしたユーモアとアイロニーをもって表現されています。

郭徳俊(1937-)は、1960年代後半のベニヤ板に胡粉や石膏を重ねる独自の絵画表現に始まり、写真や版画、パフォーマンス、映像などの多岐に渡る作品を展開しています。〈郭と大統領〉は、1974年から4年毎に雑誌『TIME』の表紙を飾るアメリカ新大統領と自身の顔を合成させたシリーズです。メディア上で世界中から注目され、誇らしげな笑顔を見せているはずの大統領と、京都に日本人として生まれながらサンフランシスコ講和条約の発効(1952年)で国籍を失うという不条理な体験を内に抱えた、無表情に口をつぐむ「無力な非権力者としてのアーティスト」。それでも画面の左に控えめに写り込んだ横顔が、この引き裂かれた自画像を生み出した作家の実存を確かに証しています。

康夏奈 (吉田夏奈)

KOU Kana [YOSHIDA Kana]

康夏奈(吉田夏奈)(1975-2020)の作品には、作家自身の身体の記憶が深く刻み込まれています。山に登る、大地を歩く、湖を渡る……慣れ親しんだ場所から遠く離れ、世界を知りたいという欲望に導かれた康は、屋久島、ボルネオ島、ヨセミテ国立公園、ノルウェーのフィヨルドなど国内外の大自然を訪ねました。時として危険を伴うような場所にも足を踏み入れ、無限の自然と有限な自分を強く意識し、肉体の限界による恐れが支配するときに訪れる意識の変革——それを彼女は Beautiful Limit の拡大と名付け、その経験の意味するところを咀嚼するかのよう作品化していきます。クレヨンによる鮮やかで緻密な風景描写で知られる康ですが、彼女の作品は、目の前に広がる自然の直接的な再現ではなく、実体験が先にあり、体感したものを解釈し編集することで生まれた果実といえます。

《花寿波島の秘密》は、2011年から約6年間滞在した小豆島で制作され、沖に浮かぶ小島をめぐる海景を、逆円錐形の中に落とし込んだインスタレーションです。康は何日もかけて繰り返し海に潜り、地上からでは想像できない水面下の世界の豊穡さに初めて触れ、その時の感情の震えや驚きを、海の底から見上げるような視点で、このフォルムの中に巧みに描きだしています。

このように3次元の風景を2次元の平面に置き換え、さらに別の3次元に変換させるという独自の手法は、小豆島の風景を切り取った作品《No dimensional limit anymore》にも見ることができます。彼女の興味は次第に、平面や立体という dimension=次元を遥かに超えて、宇宙全体の成り立ちや自然科学や物理学にまで向かいました。「一体、風景とは、空間とは、自然とは、宇宙とは、何なのだろう」と。彼女が生涯をかけて挑んだ根源的な問いは、作家亡き後もエコーとなって、観る者の感覚を揺さぶり、まだ見ぬ世界の風景や時空間を私たちの眼前に開いてくれるのです。

太田三郎

OTA Saburo

太田三郎(1950-)は1980年代半ば以降、既成の切手や消印を自らの存在証明のように使った作品、時間や場所の記憶などを主題にした切手型の作品などを制作しています。

1992年に発表を始めた〈Seed Project〉は、自然における種子の散布を郵便システムに重ね、綿毛で風にのり、自ら弾け飛び、棘で動物や人間に付着して散布される種子が「自然の力で運ばれるよりもさらに遠くへ」届くようにと構想されました。幼かった子供たちと訪れた練馬区の公園や、作品を出品した海外の各都市、1994年に移り住んだ岡山県津山、東日本大震災で津波被害にあった翌年の宮城県石巻、当館での展覧会前に訪れた木場公園……作家が日々採集した種子は、私たちが日常で使う切手という小さなフォーマットの中に精緻に配置、封入され、植物名、採集日、採集地が添えられています。

12

〈Seed Project〉では、切手の料金を表す枠の左上に採集年の下二桁が示されますが、1994年に始まった〈POST WAR〉シリーズでは、終戦後から太田の作品制作までに経た年数が記されました。〈POST WAR 無言館〉のモチーフとなったのは、作家・窪島誠一郎と洋画家・野見山暁治が第二次世界大戦の戦没画学生の遺族を尋ね歩き、長野県上田市の「無言館」に集められた自画像や家族像です。野見山と同時期に東京美術学校に学び、中国大陸で1943年に戦病死した野村萬平による自画像は、切手サイズのモノクロームに変換され、「彼らの遺作が「美術作品」として画廊や美術館で多くの観客の目に触れること」を願った太田の手によって私たちの元に届けられています。

様々な場所で人知れず地に落ちた種子や、戦争で命を落とした若い画家たち——切手の形に配されたその小さな姿に目を凝らし、過ぎゆく時間の中に消えた声なき声に耳を傾けようとする事で、植物が芽吹くように、私たちに繋がる時間と空間が複層的に立ち上がってきます。

ある日

One Day

ここでは、サム・テイラー＝ジョンソン(ウッド)(1967-)による〈Crying Men〉をご紹介します。「泣く男たち」というタイトルのとおり、ある者は口元を押さえて目を潤ませ、ある者はシャツの袖で涙を拭い、ある者は感情を抑えた様子で俯いています…。中にはよく知った顔もあるように、彼らはすべて俳優たち。この作品は、テイラー＝ジョンソンが“泣く”演技を依頼し、それを演じる男性たちを被写体としたものです。彼らが俳優と知ると、途端に彼らの表情、感情とその表出行為に対して様々な想像や不信感が沸き起ります。もしもここに写っている人物が無名の人々であったら、私たちはこの作品をどのように受け取ったでしょうか？または女性が、あるいは女性の俳優が泣いているのであれば？

現在、映画監督としても知られるテイラー＝ジョンソンは、特に1990年代アート界を席卷したイギリスの若い美術家たち(YBAs)の一人として注目を集めた作家です。過去の宗教画や古典的名画、映画やオペラといった諸形式に彼女の身近にいる人々や俳優たちを入れこんだ大規模な写真・映像作品を手掛け、虚実入り混じる中に私たちの心理状態や人間関係を巧みに表象してきました。この作品でも作家は、泣くという行為をめぐる「自意識を失うと同時に、自分を常にチェックしているという心の状態」について考え、そのフィクション性を包まず見せています。当初は「背景となる物語がない状態で俳優が泣くための方法論を観察し記録する」意図で開始された試みですが、制作に3年を要する中で、次第に観察というよりも俳優達との一種の緊迫した協働作業になっていったと明かしています。

“ある日の出来事”を装いながら、泣くという行為の複雑さを俳優の演技を通して見せる本作は、真実と事実の間を揺るがせつつ様々な読解に開かれ、私たちの感情に入り込んだ虚構性を照らし出します。その感情は一体、誰のものなのでしょう？

描く、夜

At Night

ここでは、「日々、記す」を変奏し「描く、夜」と題して、私的な空気をまとった、見る者に対して親密さを呼び起こすような作品を紹介します。

小林正人(1957-)は、描かれるイメージと絵画が在らしめる空間、その双方を同時に生成していくという、独自の絵画世界を切り拓いてきた作家です。多くの作品に描かれるモデルたちは、そのまま絵画それ自体と分かちがたく溶け合い、一体化していく……。この、受肉とも言い得る絵画の追求、その創造の契機に作家の個人的な喪失の経験があることを知ると、彼のラディカルな試みが、失われたものの回復を絵画に託す、自身の生と不可分の探求であることに思い至ります。〈Flash〉は、小林がベルギーのゲントに居住していた時期に手掛けたヌード絵画にまつわる、夜を通して描き続けた一連のドローイングの一部です。色のついた不定形の紙片に繰り返し描かれる、背を向けて横たわる女性とまたたく星々。「この星のモデル」と称される、今も作家を追いかけて止まないヴィジョンが、クレヨンやコンテのきらめく粒子の軌跡となって幾度も去来します。

マルレーネ・デュマス(1953-)のヴィジョンは、水のように、あるいは「吐息のように」現れます。南アフリカでオランダ人の子孫として生を受けたデュマスは、1980年代から絵画を手掛け、写真や古典絵画など様々なイメージ群から引用した人の顔やヌードを繰り返し描いてきました。《ツイステッド》は、中でも思春期の少年をテーマとした1点です。デュマスの作品では個人と集団の問題が多く扱われますが、ここでも子供が一人の個人となるはざまの居心地の悪さや揺らぎが、水彩のような滲みを伴って浮かび上がります。

作家が繰り返しそこへ立ち戻るモチーフやヴィジョンの終わりのない追求は、作家の思惟や創造の初発の衝動を見る者に想起させます。それは、各々が私的でありながら共有し得るものである、という芸術の旧くも新しい一面を確かに伝えてくれるのです。

記憶の在り処

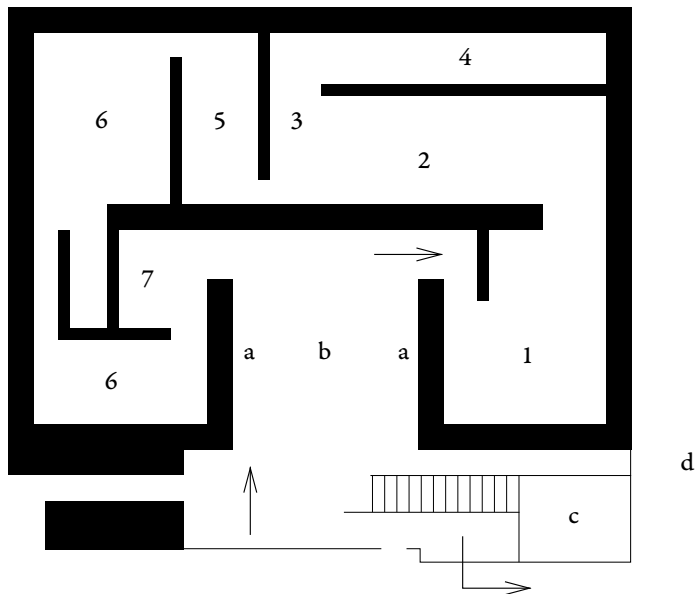
The Whereabouts of Memory

「日々、記す」ことは忘却に対抗することでもあるでしょう。作家たちは様々な仕方ですれを免れ、また再生しようとしてきました。

クリスチャン・ボルタンスキー(1944-2021)は、先ごろ閉じられたその生涯を通して、先の大戦にまつわる歴史と記憶、死の表象に関わってきた作家です。その制作は、「過去の保存と痕跡」を核としつつ、ユダヤ系フランス人の父親の死(1984年)を契機にホロコーストを想起させるものへと変容していきました。《D家のアルバム、1939年から1964年まで》は、友人一家のアルバムをもとに、戦争を挟む25年間を時系列に構成した作品です。その「模範的」な場面の数々は、失われた時の感触とともに、自身の記憶へと見る者を振り向かせ、私たちが記憶というもののをいかに集団的な約束事のうちに捉えているかを実感させます。こうした個別性と集団性は、以降も作家の関心の中心であり続けました。壁のように積まれた大量のビスケツト缶からなる《死んだスイス人の資料》には、新聞の死亡欄から切り取った写真が貼られています。私たちは何も知らずにこの作品を見ても、彼ら彼女らが死者であることに気づくでしょう。ボルタンスキーの作品は、個人の死の重さと軽さについて、その等しくも唯一である本質を見る者に直観させます。「理解を超えて生まれるエモーションの再現」を目指すと言った作家は、私たちのイメージ記憶の貯蔵庫を探りつつアーカイヴの仕組みを批評的に用いて、記憶を再生する装置としてのインスタレーション作品を生み出しました。

これら数多の顔が浮かび上がる作品の奥では、映画監督としても知られる、アピチャップン・ウィーラセタクン(1970-)の《エメラルド》をご覧ください。本作は、作家の母国であるタイのバンコクを中心にあつた、同名の古いホテルをテーマとしたもの。過去にホテルを訪れた人々の声や詩の朗読が重なり、部屋を舞う光をはらんだ埃とともに記憶の欠片のように漂い、降り積もっていきます。

1F

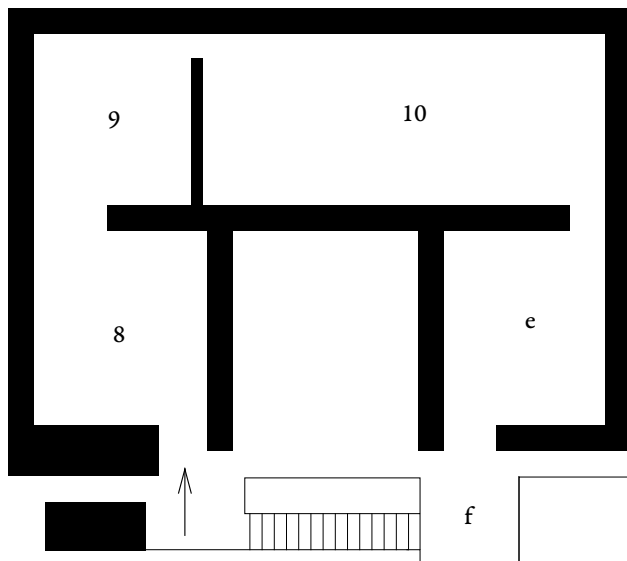


16

- | | |
|---------------|----------------------------------|
| 1. Chim ↑ Pom | 1. Chim ↑ Pom |
| 2. 大岩オスカル | 2. Oscar OIWA |
| 3. 河原温 | 3. KAWARA On |
| 4. フルクサス | 4. Fluxus |
| 5. 三島喜美代、郭徳俊 | 5. MISHIMA Kimiyo, KWAK Duck Jun |
| 6. 康夏奈(吉田夏奈) | 6. KOU Kana [YOSHIDA Kana] |
| 7. 太田三郎 | 7. OTA Saburo |

- | | |
|----------------|---------------------|
| a. オノ・ヨーコ | a. ONO Yoko |
| b. アルナルド・ポモドーロ | b. Arnaldo POMODORO |
| c. 保田春彦 | c. YASUDA Haruhiko |
| d. 鈴木昭男 | d. SUZUKI Akio |

3F



17

-
- | | |
|------------|-------------------------------|
| 8. ある日 | 8. One Day |
| 9. 描く、夜 | 9. At Night |
| 10. 記憶の在り処 | 10. The Whereabouts of Memory |

-
- | | |
|-------------|--------------------|
| e. 宮島達男 | e. MIYAJIMA Tatsuo |
| f. アンソニー・カロ | f. Anthony CARO |

Photo Credit

©Chim ↑ Pom Courtesy of the artist, ANOMALY and MUJIN-TO Production (p.7)

©OSCAR OIWA, courtesy of Art Front Gallery (p.10, 11)

©One Million Years Foundation (p.13)

Masaru Yanagiba (p.9)

Shizune Shiigi (p.15, 16, 17)

Eiji Ina (p.23)

Kimito Takahashi (pp.24-25)

Hideto Nagatsuka (p.29)

Keizo Kioku (p.33, 34, 35)

謝辞

本展の特別出品並びに特集展示のためにご出品、
ご協力を賜りました皆様に、心より感謝の意を表します。
(敬称略・順不同)

大岩オスカル

国際交流基金／パリ日本文化会館

アートフロントギャラリー

立和名宏

執筆

鎮西芳美 (p.6, 10, 30, 32, 34)

水田有子 (p.14, 16, 20, 29)

森千花 (東京都庭園美術館) (p.24)

翻訳

クリストファー・スティヴンズ

デザイン

三木俊一 (文京図案室)

編集・発行

東京都現代美術館 ©2021

Acknowledgement

We would like to express our sincerest gratitude to all
contributors for their cooperation. (honorifics omitted / in
random order)

Oscar Oiwa

The Japan Foundation/

Maison de la culture du Japon à Paris

Art Front Gallery

TACHIWANA Hiroshi

Texts by

CHINZEI Yoshimi (p.6, 10, 30, 32, 34)

MIZUTA Yuko (p.14, 16, 20, 29)

MORI Chika (Tokyo Metropolitan Teien Art Museum) (p.24)

Translated by

Christopher Stephens

Designed by

MIKI Shun-ichi (Bunkyo-zuan-shitsu)

© Museum of Contemporary Art Tokyo 2021